「戦争体験」のジェンダー化された序列
――第一次世界大戦後アメリカ合衆国の事例から――

日本学術振興会　望戸愛果

１　目的

本報告は、第一次世界大戦後アメリカ合衆国（以下、アメリカと略記）の事例から、「戦争体験」のジェンダー化された力学を解明することを目的とする。「とどのつまり、戦争は男らしさへの誘いであった」と指摘する歴史学者 G・モッセの「戦争体験の神話（化）」をめぐる議論は、戦争において女性が果たす役割を重視するジェンダー研究者からも一定の支持を得ている。たとえば、第一次世界大戦期におけるフランスの看護婦の事例を論じた M・ダロウは、モッセの『英霊』を参照しながら、以下のように指摘している。「女性が戦争体験を主張する最も簡単な方法は、対立的な女らしい戦争を定義することではなく、祖国に献身する男らしい戦争神話を抱きしめ、その神話を女性のために主張することであった」。しかしながら、「祖国に献身する男らしさ」とは、そもそもこのように静態的に語り得るものであろうか。本報告では、政治学者 C・エンローの「軍事化された男性性のヒエラルキー」をめぐる議論も参照しながら、「男らしい戦争神話」をジェンダー視角から批判的に相対化する新たな分析枠組みのあり方とその意義とを示す。

２　方法

報告者は第一次世界大戦後アメリカ在郷軍人会における男性退役軍人と元従軍看護婦の「戦争体験」を検討してきた（望戸 2017）。本報告では、在郷軍人会において会員資格を正式に与えられることのなかった看護婦以外の女性従軍体験者の存在にも焦点を当てて論じる。分析に使用する主な史資料は、1920 年代アメリカにおける退役軍人組織機関誌等である。

３　結果

先行研究の整理および史資料の分析から構築した報告者独自の分析枠組みが、「『戦争体験』のジェンダー化された序列」である。この分析枠組みに基づけば、男性退役軍人の「戦争体験」は序列化されており、さらにこの序列は動態的なものとして把握されることとなる。また、従軍看護婦の「戦争体験」は序列の最周縁で抑圧されつつも、一時的に序列の中心付近への接近が可能になる場合がある。そして、序列から排除されたその他の女性従軍体験者は、「戦争体験」の異なる配置を構築し得る。

４　結論

戦後社会において根強く効力を持つ「男性の戦闘体験」を頂点とする序列の存続過程を解き明かす、より多層的かつ動態的なジェンダー分析の必要性を最後に指摘して、本報告の結論としたい。

文献

望戸愛果，2017,『「戦争体験」とジェンダー――アメリカ在郷軍人会の第一次世界大戦戦場巡礼を読み解く』明石書店.